

「更科日記」 藤原孝標女(ふじわらたかすえのむすめ)

紹介者：榎本博康

[紹介]

更科日記は、藤原孝標女が13歳から52歳までを回想により執筆したものである。

著者の父、藤原孝標は上総国(千葉県)に赴任していたが、任期が満了し京に帰る。当時13歳の筆者は、京で源氏物語などの物語を読み尽くしたいと念じていた。

在宅出家した母に代わっての主婦業で遅くなるが、30歳近くで結婚。宮仕えもするが、性に合わずに見習い程度で辞す。寺々におこもりしたり、信仰を深めるが、信濃に赴任した夫は8ヶ月で帰京し、死去してしまう。

[感想]

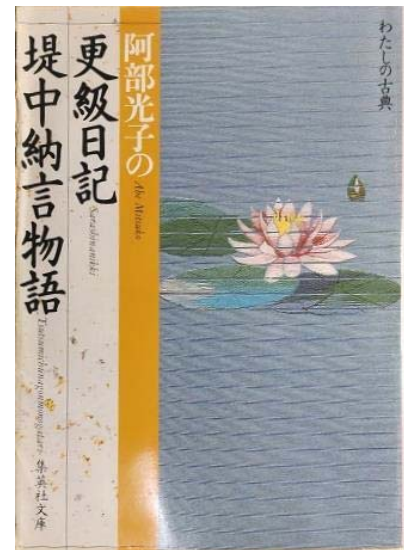
多くの人がそうであるように、私と更科日記の出会いには高校生の時であった。夏休みの特別授業というのがあって、希望者が好きな講座を受講する。本書は分量や内容から、古典への入門書として適切なもののひとつである。

彼女は菅原道真の系統である学者の家に育ち、陽炎日記の作者の右大将道綱の母が叔母であるといった環境で、自然と文学への憧憬が、しかも上総の国では草子が乏しいのに、家族が源氏物語などの話を盛んにする中で、いや増していった。

そして走る。3ヶ月を費やしてやっと京都に着いてからは、上総に行かずに京に残っていた母に源氏物語などの入手をねだる。そして親は子供に甘い。ある叔母を紹介してくれた。そこを訪ねると、「まあまあ、ずいぶん美しいお嬢さんになりはったなあ。(京都弁のつもり)」と歓迎してくれ、帰る時に、お土産として「実用品では夢がないよって、欲しい言うてはったらしいものにしましょ。(以上、現代誤訳)」と、源氏物語50余巻が入った箱をくれた。さらに多くの物語が入った袋もおまけだ。この部分の原文～『源氏の五十餘巻、ひつにいりながら、(中略)物がたりども、ひとふくろとりいれて、えてかへる心地のうれしさぞいみじきや。はしるはしる、わずかに見つつ、心も得ず心もとなく思う源氏を、一の巻よりして～(以下略)』

高校生の私は、こいつはとんでもない怪力女だと思った。この大荷物をおつかいで走るのだ。それはいくら何でも無理なので、これは心の状態を描いたものと解釈したが、それにしても、はしるを二回も重ねている。並の表現ではない。

しかし、この解釈は間違いだ。彼女は高級官僚のお嬢様なのだ。自分で荷物を持つなどということは有り得ないし、単独での外出も有り得ない。そんなことはあたり前過ぎて書いてないのだ。彼女は38歳の時に石山寺参りをしているが、鎌倉時代に描かれた石山寺縁起絵巻に、そ



昔、特別授業で使用した本は薄く地味な装丁であった。

の時の旅行の様子がある。これを見ると、初雪の中を逢坂の関にさしかかる一行は、彼女の乗る車（牛に引かせるものではなく、人間が引くもの）に車夫が4人、馬上の武士が3人、馬上の侍女が1人、徒の者が2名、総勢11名である。

源氏物語を入手した時は、市内なのでこれほどではないだろうが、伴の者と車はあったのだろう。今はふたつのシーンを想像する。ひとつは、車ではまどろっこしいとばかりに、彼女が荷物は持たないが本当に走って、供の者が車を引いて追っかけ、苦勞している姿であり、今ひとつは牛車で来たので、牛にムチが入って京都の町を暴走する姿である。そして家に帰ってからの彼女は、几帳を立てて内に籠り、もう一言も口をきかないで、源氏物語第一巻から昼夜を分かつたず耽読し、本をそばに置けない時は、一字一句を思いだしてたどった。

所で、古典文学者はもちろん「彼女自身が走る」とは考えていない。小学館の日本古典文学全集十八では、「はしるはしる」を、「とびとびに」の意とし、他に「胸をわくわくさせ」、「帰途の車を走らせながら」などの解釈もあるとしている。岩波文庫ではこの二番目の解釈を採用し、他にも説があるとしている。ここで冷静に判断すれば、日本古典文学全集が正しそうだ。「今まで源氏物語の断片をとびとびにしか読んでなくて、（またはとびとびにしか話を聞いてなくて、）話の筋も内容も納得がいかなかったが、それを第一巻からじっくりと〜」という解釈である。そう学んでから見ると、確かにその通りに原文に書いてある。諸説を議論するような難しい問題ではないように思う。

意味は分かった。現代でも「走り読み」という言葉が使われている。それと同じだ。しかし高校生の私が想像した、京都の街を源氏物語が入った櫃を担いで翔け抜ける怪力女のイメージは大切にしたい。

さて、高校以来で読んでみると、さすがに年の功で分かることもある。例えば、姉と、十三夜の夜更けに縁側に出て話をしていると、近所の家に貴人の車が停まって、供のものに呼ばせるが、中から応答がない。やがてあきらめて帰って行った。当時は通い婚である。作者が、「どうして返事をしなかったのでしょうかね」という意味の歌を詠むと、姉は「あの程度で帰ってしまうなんて、女心を知らないタコね」と現代誤訳ができる歌を詠む。これは、すでに男が通っていた姉と、まだ夢見るだけの作者との違いを的確に書きこんでいる場面だ。翌年、姉は出産で死ぬ。

ここで、私が気になっているのは、登場人物達の描き込み方だ。父の孝標は地方の行政官がせいぜいの人で、詩作や書はまるでだめだったらしい。しかし彼女の兄、定義は文章(もんじょう)博士にも大学頭(だいがくのかみ)にもなっていて、地方行政官もした。冒頭の京に帰る紀行の中では、この兄のやさしい行動も書かれている。でも京都に入ってから、まるで避けるように書かれていない。彼女の夫の記述も少なく、何となく期待はずれの結婚生活が読み取れるという説もある。一方、姉との交情は深く書かれ、父のこともそこそこには書かれている。また、源氏物語のロマンを夢見続けた少女だった彼女が現世でほんのわずかにかなった、管弦の名手、風流の化身である、源資道(みなもと の すけみち)との2回半(なぜこの回数かは読んだ人だけが分かる)の会話に多くの記述を残している。

これらの差は何であろうか。書かれていない人々が、彼女にとって無意味な人達であったわ

けではないことは、記述の合間から見える。どうもその差は、孝標女が52歳での執筆時点で、人々が故人であったか否かではないだろうか。

姉も夫も源資道も故人となってしまった。それに引き換え、兄はバリバリの現役である。権謀術数の渦巻く貴族社会で、なまじのことは書けなかったのではないか。兄が地方行政官であったときに、作者はその地に旅をしている。しかし、道中のことをさりと書いているのみだ。では既に亡くなった夫の場合はどうなのであろうか。彼は信州(更科)に赴任して、わずかで帰京し、死去する。この夫の記述も極めて少ないが、息子がこれからなので、やはり多くを書くわけには行かなかったのであろう。息子が夫と共に信州に旅出つ場面は、親ばか丸出しではほえましい。

つまり、更科日記も読まれることを念頭に置いた著述である。そしていくつもの幸運に恵まれて、今日我々の読むものとなった。執筆から170年後に藤原定家が直筆で書写し、後世に残ることになった。その写本の巻末に、「先年、この草紙を手に入れたが、人に貸して紛失されてしまった。よって写本より、書写したものである」と記入があり、失くされたために定家の直筆本ができてしまった。紛失した人の名前は、藤原定家の日記にしっかりと書いてある。そして定家の直筆という国宝級の価値があるので、天皇の御物となり、現在も保管されている。更科日記は底本がこれしかない。しかし書写を繰り返したためか、何故か難解というか、意味の分からない部分があった。それを1924年に佐佐木信綱と玉井幸助が、本を修理する際の綴じ違いと看破して、今日の形になった。孝標女は、実は彼女自身も物語りの作者であり、『よはの寝覚』『みつのはま松(浜松中納言物語)』を著したと定家が書き残しているとのこと。

2007年に菅原孝標女の生誕千年となる。または彼女の旅から千年の2020年に伊能ウォークのように更科日記のコースが流行るかもしれない。まさか当時のように富士山は火を吐いていないと思うが、最近では低周波振動で不気味である。平安時代の歌では、活火山富士山頂の火は、燃える恋心を表すものであった。

(初稿2001. 6. 15)

[リバイバル感想]

これは小さな奇跡のものがたりである。私は「走り読み文学探訪」を2003年2月に上梓した。そして雑誌「ランナーズ」の取材を受け、6月号に掲載していただいた。カラー2ページ見開きの扱いである。(その他「日経おとなのOFF」など、いろいろと取り上げていただいた。)すると高校時代の同級生であり、ランニングが趣味であるS君がこの記事を見つけ、30年以上全く会っていなかったが、これが私だと確信して、同期会に「発見」として報告した。発見された私は、後日会員名簿を入手した。そこで、本稿の更級日記の講習をした、宮崎寿美枝先生の九州の現住所を知った。そして、本書を2004年10月に先生に郵送で贈呈することができ、またいろいろとご指導をいただいたお礼をお伝えすることができた。嬉しいことに丁寧なご返信をいただくことができた。しかし残念なことに翌年に急逝してしまった。享年84歳であったとのこと。生涯独身で教育に尽くした障害であった。とうとう再びお会いすることはできなかったが、ぎりぎり手紙での交信ができたことは幸いであった。そう、この同期会は「すみえ会」と言い、私の学年で、1年から3年の間に宮崎先生にクラス担任をしていただいた者たちの集まりであ

る。

宮崎先生にはとてもお世話になった。いろいろあるが、卒業式の日の事を紹介しよう。

その朝だ。廊下で私を捕まえて、君は精勤賞表彰で壇上にあがるのだと言われた。この年は担任では無いので、他所の組の先生がわざわざ言いに来たということだ。これには驚いたが、おそらく誰が壇上で受け取るかで、宮崎先生が私を推薦したのだろう。ちなみに皆勤賞と精勤賞があって、それぞれ対象者は数人ずついて、それぞれ一人が代表して壇上で校長先生から賞状を受け取る。私は皆勤ではあったが遅刻が数回あったので、精勤と言うことだったと思う。私は都電で通っていたが、だんだんと交通渋滞で遅れ気味になっていたという時代背景があった。もっと詳しく説明すれば、私の乗る都電は専用軌道で、かつては自動車が走ることがなかったのだが、東京オリンピックを契機に自動車交通量を増やすために併用軌道になった。（実は入学の年に地下鉄が開通し、その利用の方が時間的には合理的だった。都電の方が安かったのだろうか。）

そして式後に精勤賞の確認に来て、さらに記念品が認印であることについて、今は必要ないと思うかもしれないが、社会に出れば多くのハンコを使う場面がある。一生、大事に使いなさいと。



これは心に刻む言葉のひとつになった。大学、入社、結婚届等にこのハンコは大活躍をした。現在もしっかりとした印影は健在であり、自営業としての仕事に日常的に使用している。使うたびに感謝の気持ちが自ずと湧いてくる。

高校卒業記念の認印の袋はボロボロになった。現在は新しい袋だが、ハンコ自体は使い続けている。

(2021. 8. 21)